

平成 23 年度 海外渡航旅費助成金成果報告

産業技術総合研究所 活断層・地震研究センター

特別研究員(PD) 林田 拓己

このたび、平成 23 年度海外渡航旅費(前期)の助成により、2011 年 4 月 3 日より 6 日間に渡ってオーストリア・ウィーンにて開催された欧州地球科学連合(EGU)の 2011 年総会に参加させていただきました。本総会は米国地球物理学連合(AGU)秋季大会に次ぐ規模の地球科学に関する国際学会であり、数多くの講演やポスター発表が行われました。参加報告は以下の通りです。

私は、2 日目に開催された「The QUEST project: progress on inverting seismic waveforms for sources and Earth's structure using 3-D wave propagation」セッションにてポスター発表を行いました。私の研究は西南日本の地震波速度構造を「波形モデリング」と「走時トモグラフィ」という異なるアプローチを相補的に行いながら検証・改善するという内容であり、セッションの趣旨に沿った有意義な発表・議論が出来ることを大いに期待して臨みました。EGU のポスター会場は複数の広間を利用した展示方法になっており、セッションによっては会場の人数にばらつきが目立つように思いましたが、私のポスターに関しては説明を熱心に聞いてくださる方も居られて、満足のいく発表を行うことができました。同セッションでは、アルゴリズムの開発など理論的なアプローチに焦点を置いた発表が中心だったのですが、私のように実際の観測記録を用いた研究事例に対しても興味を示してくださる方が少なからずいらっしゃいました。昨年、別の国際学会で意見交換をさせて頂いた先生もお見えになり、有益なコメントを頂くこともできました。このように充実感を得た発表となりましたが、一方で、多数のポスターが複数の場所に展示されている今回のような会場構成であれば、図や説明文を多様に用いるのではなく、むしろ研究成果を一目で判断して頂けるようにシンプルな図や説明文を掲載するに留めた方が良かったのではないかという反省もありました。

本大会の地震学に関するセッションで最も注目を集めたのは、やはり最終日に開催された東北地方太平洋沖地震に関する緊急セッションでした。セッションの告知から学会開催まで1週間しかないという状況でしたが、講演、ポスター発表、パネルディスカッションが丸1日にわたって開催され、緊急セッションとしては異例の規模を誇るものでした。ヨーロッパの地震学会としても今回の大惨事を深刻に捉えていることを実感しました。ポスター会場では、震源モデルの推定から津波による被害、地震に伴うグローバルな現象(湖での波の励起、南極の流氷の流速モニタリング)など、多岐に渡る発表が行われました。個人的に1日を通じて特に印象に残ったのは津波警報に関する議論でした。地震波を用いた解析では巨大地震のマグニチュードを即時に把握することが難しいため、迅速かつ高精度な津波警報を発令するにはどのような手段を講ずるべきか等の討論がパネルディスカッション形式で行われたのですが、「警報に頼るだけでなく、沿岸地域で地面の揺れを感じたら直

ぐに津波に警戒できることが重要だ」「津波の第二波以降も危険であることを一般に周知させなければならない」等、アウトリーチ活動や学校教育の重要性を説くコメントもあり、専門家として今後の地震・津波災害に対してどのように対峙していくべきか、出席者1人1人が改めて真剣に考える契機になったと思います。

私自身、EGUへの参加は初めてでしたが、大会専用のtwitter、写真コンテストや映像シアターなどのイベントも準備されており、空き時間も学会を満喫できる工夫が随所に凝らされていました。博士課程やポスドク研究員のための就職支援ブースでは、企業・研究所の合同説明会が開催されていました。企業・研究所側から一方的に情報を提供するだけでなく、志願者が自身のレジュメを掲示できるスペースも提供されており、学会として若手支援に積極的な姿勢を感じ取ることができました。

今回は自分自身の周囲を含め、学界全体が深刻な状況になっている中での海外渡航となりましたが、EGUに参加することによって自分自身の研究はもとより、今回の巨大地震に対する海外の研究者の受け止め方を知ることができたことは貴重な経験でした。本助成に関しまして、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。